

る苦しみです。気の毒にとつぶやきながら安らかなご冥福を祈りました。二度と戦争の悲劇を繰り返してはならない。誰にも私達が行いた二一〇キロの苦しみを味合わせてはならないと心に誓いました。

国の為 命捧げし 人々の

真心しのびて 涙溢るる

馬と人 歩きつづけて 四年余に

越えし山坂 二一〇〇キロ

### 三回死から逃げられた運

長崎県 長田久徳

私は大正十二（一九二三）年一月三十日、福岡県門司市で生まれました。父は小倉連隊の獣医でした。私の初誕生日の頃若死にし、兄弟はなくて、母一人子一人の家庭で成長しました。学歴は

県立門司中学校卒業で、門司鉄道局用品課へ奉職し、汽車の石炭購入のため、ほとんど九州全域の炭鉱を巡りました。

昭和十八（一九四三）年徴兵検査、甲種合格、母一人子一人の家ながら気丈な母に励まされて、昭和十九年三月十五日現役兵として福岡の歩兵第一一三連隊補充隊へ入営しました。

朝鮮經由満州へ、幹部候補生を命ぜられる。満州を転々と移動し、西部軍管区司令部に転属され、朝鮮を経て九州の久留米へ、終戦。陸軍少尉に任官。召集解除復員しました。

福援恩証第四六〇九号履歴証明書に正確、詳細に証明してあります。

概説しますと、私の軍隊での労苦体験はなかったと言えましょう。当時、満州はまだまだ食料は豊かで、内地から来た我々はビックリする位でした。加えて慰問袋は沢山くるし、冬寒くなるとパーチカをたいて暖かいし、パーチカの上へリン

ゴを並べて焼いて食べました。

兵舎の前には杏の木が沢山植えてあり、季節が来ると美しいピンク色の花が沢山咲いて天国のように楽しい。ずーっと向こうに川があり馬を連れて行くなど、内地にいる以上の恵まれた条件で、実戦の経験はなく、悪評高い例の個人制裁や対向ビンタの体験もなく、何の苦勞もありませんでした。

さて、私の入営当時のことを話しましょう。私は父が早く死んで、母の手一つで育てられました。母は授産業を営んで若い女の子を連れてジュバン、ズボン下等の縫製をしていましたが、戦局の推移の激化に伴い、軍当局よりの発注も軍服、帽子をはじめ各種の被服等が多種になり、大きいお寺の建物へ入って、ミシンを百台以上置いて、従業員も出征兵士関係の家庭の娘さんや若妻で組織し、最後は百五十人位いたと思います。

私は入営するに際して、鉄道局からは一人も見送りに来なかったのですが、母の授産場の若い女

性が百人余り見送ってくれました。華やかな風景であったそうです。こんな経験のある者は日本広しといえども、そうざらにはいないであろうと思います。

かくして昭和十九年三月十五日、福岡歩兵第一一三連隊補充隊へ入営。苦しい教育訓練はなく、内務班も予め聞いていた厳しきもなく、三月二十七日には歩兵第二十四連隊に転属、博多出発となり、出発に際しての相次ぐ予定行事があり、物品（兵器や被服、装具等）の受領、予防接種、その他の行事に忙殺されました。

博多より船で釜山上陸、釜山より列車輸送となり、鮮満国境の囹圄通過が三月三十日、いよいよ満州だと気分も引き締まると共に寒さも加わってきました。

三月三十一日、牡丹江省東寧県大城子へ着き、広場に集合して入隊式が行われました。雪が沢山降って寒かったのを強く覚えていきます。

我々は歩兵砲中隊に編入され、連隊砲、大隊砲、速射砲などにより編成されており、厳しい訓練が始まりました。軍隊では砲隊と言えば馬はつきもの、馬の世話は大変でした。しかし我々が在満部隊はその点大変恵まれており、馬の世話一切は隊内の満人の苦力がやる。我々は厩まで帰れば、後は全部満人がするので非常に助かったです。内地や支那南方では考えられないことでした。

ある日、週番士官から中隊長室に行くように指示され、中隊長殿より「長田！ お前は幹部候補生の受験資格をもっているのです、受験せよ」と命令されました。

秘して試験日の連絡があり受験しました。その後合格の連絡を受け、昭和十九年六月十日、幹部候補生を命ぜられました。そして六月十日付をもって上等兵の階級を与えられ、その後兵長、伍長、軍曹（十二月十日付）と階級が進められました。

昭和十九年十二月二十日、歩兵第二五九連隊に転属、同時に東寧県老黒山に移動、昭和二十年一月十日、関東軍歩兵第二士官候補者隊に入隊、一月十一日、間島省延吉に移動、四月二十二日、牡丹江省寧安県石頭に移動となりました。

さて、ここで一度目の、死から逃げられた運です。

昭和二十年五月二十日、石頭にて中隊長殿より「長田！ お前は母一人子一人の家庭であるな」と言われ「はい」と答えました。この中隊長殿の一言が私のこれから先の軍人としての運命を大きく大きく変えたのです。

昭和二十年五月二十四日、西部軍管区司令部に転属が命ぜられ、福岡久留米予備士官学校へ分遣されることとなり、直ちに石頭を出発、五月二十六日鮮満国境の図們を通過しました。列車は十三輛連結、五月二十八日に釜山港に到着しました。

この前後の数日の間、関東軍の精鋭を南方へ大移動した山下將軍、さらに内地防衛にと我々幹部候補

生ほか約一千人が釜山に集結しました。そしてその後、満州からは、引き続き南方や内地への大移動が行われて、今や満州の関東軍は昔日の面影はなく、一部の警備部隊のみとなったのです。

不埒千万なソ連は一方的に不可侵条約を破棄して、まるで空家のような満州へ攻撃、侵入してきました。そのソ連軍の南下スピードは驚く程早かった。今ここで私達の出発がちょっとでも遅れていたなら、恐らく戦死していた事に間違いないと思います。これはまさに私の力ではない、ただ運が良かったからです。

次に、二度目の死から逃げられた運です。

昭和二十年五月二十九日、釜山港において早朝未明、大声で名前を呼ばれ、直ちに二十人程の小部隊で小船に乗り「お前達は先発だ。先に博多へ上陸し命令を待て」と言われました。未だ暗かった釜山港を出港して約二十分経過した頃より上空に数機の飛行機のライトが望見されるのです。日

本軍の飛行機が警戒援護しているものと思ひ込んでいると、間もなく遠くで爆発音が聞こえ火の手が上がりました。

船員が「あれは敵機だ。後続の輸送船がやられた」と叫んだのです。これは重大なことだ、大きな衝撃が私の度胆を貫き悪寒が走りました。もし私が先発でなく後続の輸送船に乗っていたら、間違いなく死んでいたのであろう。まさに私の力ではなく運があったからだ、運に感謝することしきりでした。

最後に、三度目の死から逃げられた運です。

昭和二十年五月二十九日、無事に博多港に上陸する。まず驚いた事に若い兵隊が二百人位、全員白い鉢巻をしていました。ところが後で聞いた所では、戦闘帽が間に合わず鉢巻で代用している所知り、愕然として空を見上げました。

さて私共先発隊は後続が来ないため全くどうしてよいか分からず、福岡連隊へ命令受領に行った

のですが、一千人以上来るべき所へ、僅か二十人とは大変驚き、「もう処置なし、万事休す」で命令受領は叶わずでした。

昭和二十年七月十九日に福岡久留米予備士官学校の教育は終了し、同日付をもって曹長の階級に進められ見習士官を命ぜられました。そして七月二十日、久留米師管区歩兵第三補充隊に転属、さらに花畠町へ移動しまして、その小学校の小さな一部屋を借用して、専ら防空壕掘りをやっていたのです。

はつきりと覚えていませんが、昭和二十年七月頃、門司が敵B29の大空襲により壊滅。母の授産場も全損で、ミシン、原材料、半製品、製品等一切を火災で灰に帰した大惨事となりました。母は身一つで門司の一つ山向こうの母の実家へ避難したとのことでした。

またある日の夕方、北方向福岡市方面で爆弾の音がして、火の手が上がっているのが久留米からも判明できました。これは福岡大空襲の夜のこと

で、もし我々幹候生が福岡連隊に留まっていたとすれば、死亡または大負傷していた事には間違いないありません。福岡連隊本部及び福岡市内の大部分が焼失した夜のことです。私が逃げたのではなく、運がよかったからです。今も何とも言えない複雑な思いです。

以上三件私が逃げたのではなく、軍の命令に従って転属あるいは移動したのです。しかし一歩その歯車が狂えば、死の崖淵があったことを思えば、身の毛がよだつ思いです。

その後は、八月十五日の終戦、十九日に現役満期、二十日に陸軍少尉に任官となり予備役編入。引き続き臨時召集により補久留米師管歩兵第三補充隊付となり、九月二十日に召集解除により復員しました。

復員後は、門司の鉄道局へ復職、昭和二十五年に三菱長崎造船所へ転職し、昭和五十八年に停年退職しました。

結婚は昭和二十八年三月十八日です。子供は一  
姫二太郎、上から女、男、男です。孫は四人を恵  
まれております。現在は私たち老夫婦、三人の子  
供、四人の孫とすべて揃って元気です。

その後、長崎県砂採取船事業協同組合の設立に  
協力し、初代事務局長となりました。次いで軍人  
軍属恩給欠格者の組織作り運動の草分けの一人と  
して参加して、長与町支部長を引き受け、その後  
に長崎県連の事務局長となり現在に至っていま  
す。

また、昭和末期昭和六十三年頃より国会議員・  
松村謙一郎の秘書を二カ年程やりました。そして  
現在は参議院議員・松谷蒼一郎の手伝いをさせて  
貰っております。現在八十二歳です。まだまだ元  
気です。地獄の閻魔様も私の強運な人生を遮げる  
ことはできないと思っています。このような兵隊  
人生もあるのです。

調査員（村上）註、

『長田氏の兵隊人生は武運長久この上なく、目

出度し目出度し。万歳!』。

## ソ連抑留からの脱出行

### — 関東軍通信兵の苦難 —

滋賀県 平野 喜三

私が昭和十六（一九四一）年一月、通信兵とし  
て入隊するため広島県呉市の練兵場に集合して、  
私服を脱ぎ軍服に着替え、帯剣を腰にした時は、  
日本男子として国のために尽くす気概に満ち溢れ  
るものを感じました。

当時の我が家は酒類の販売を家業としており、  
家族は両親と兄、姉、私、妹、弟の七人家族であ  
りました。

私は立命館中学で柔剣道、馬術、射撃等の訓練  
を受けておりました。中学を卒業して東京の高等  
工業学校を卒業して冲電気㈱に入社し、通信機器  
の製造に携わっていましたが関係から、徴兵検査の